

狂言寸言

前田正民

狂言は室町時代の口語によって書かれていると言われ、当時の社会の生活様式を基にして作爲されているのであるが、滑稽諧謔の中に多くの諷刺をひそめ、笑いを主眼とした戯曲脚本である。謡曲は能の脚本代用的のものであるが、狂言は殆んで完全な脚本になっている。演出は能が襟を正すようなまじめなものであるのに狂言は破顔一笑寛いだ気分ひたらせる。文章も謡曲は衛学的な美辞麗句で飾られているのに対し、狂言は全く無造作な平語で述べられ、二者著しい対照をなしていることは周知の事象である。

謡曲は衛学的であるだけ随分種々な注釈書が出ているが、狂言の方は故事典拠などにかかわっておらず、時に今日では意味不明なことが多少はあるが、大体誰が読んでも解し易いので格別な注釈書はあまり出ていない。狂言のことばについては、創元社出版の能楽全書第五巻能と狂言に亀井孝氏の「狂言のことば」があり、昭和二十四年頃から雑誌「能」に古川久氏の「狂言ことば」が連載され、注釈をしておられるのが注目される。

従来狂言は、絵入狂言記とし万治三年に刊行されたものなどによって世上に広まったが、現在実演のものとは大分違うので、とかく非難されていた。ところが大正五年から同八年に亘って和泉流の宗家の名によって和泉流狂言大成が出され現行のものを網羅している。更に大正十五年から昭和二年に亘って野村万斎氏によって新編狂言正本五巻が公刊された。万斎氏のは全曲ではないが、和泉流の現行曲を見るには最も確実なものである。しかし古体そのままのものではない。そこで文学的に研究するには、少しでも古いものが望ましい。幸い昭和十七年から同二十年に亘って大蔵虎寛本が岩波書店から笹野堅氏校訂の下に公にされた。虎寛本の奥書によると、寛政四のとし神無月末の五日の日附がある。さほど古いとはいわれぬが、これによって伝統の正しい狂言の古い姿をある程度伺うことが出来ることはありがたいことである。

狂言の文章は当時の口語が書かれているというが、それによって当時の習俗や語法などを知るのに非常に参考になることが

多い。しかし普通狂言の文章を教科書に載せる場合には、文字の誤りや送假名その他を訂正しているので、研究的には却って不十分な憾がある。そこでここに大学生達のために、岩波文庫本の中から「かまばら」の一篇を取って元の形で紹介することとする。

岩波文庫本では校訂者によって振假名が施され送假名などが補われているが、今はその振假名を除き、送假名だけは（ ）の中に加え、原文の仮名遣や文字の誤っているのは右側に△印をつけて掲げることにした。ただ当字でも広く認められていたものはそのままにしておいた。また岩波文庫本にシテや濟人・女などの役々は（ ）の中に入れてあるのを（ ）をやめて詞の始めに「をつけて示すことにした。また漢字は大体现行の書体としたことをこわっておく。

か ま ば ら

初はどもりのごとく、シテを女追ふて舞合ををへん廻る。中媒跡より付(い)て出(で)、太波座にて見合(ひ)、女追ふて来る所を留る。シテは一の松へにけて行(へ)。詞もどもり同断。

濟人「是は先(づ)何とした事でおりにやる。女「こなたも聞(い)て被下い。あの男は三界を家として、夜どまり日留りを致いて、屋根の漏までをわらはにさゝせまする。今日もたま／＼戻りましたに依(つ)て、山へ参(つ)て薪を取(つ)て参れと申せば夫も参りませぬ。生(け)て置(い)てもなんのやくに立(ち)ませぬに依(つ)て、打(ち)殺いてわらはも死(に)ます。そこをのかせられい。シテ「あゝ、とめて被下い。濟人「イヤ／＼、身共が出ては聊齋はさせぬ。きつと叱らう程に、先(づ)夫に待(た)しめ。女「心得ました。濟人「なうそこなもの。シテ「近頃面目も御座らぬ。濟人「面目もないと云(う)て、今お内儀の云(は)るゝを聞(け)ば、三界を家として、夜泊りひ留りをして、世たいの事には少しも構はず、屋根のもり迄をお内儀にさゝする。其(の)上山へいて薪を取(れ)といへば、夫も行(く)まいといふ事が有(る)物(もの)でおりにやるか。シテ「去(れ)ば其(の)事で御さる。私もあなたにあなたに旦那が御ざって、夫へ参れば、能う来たといふて留(め)させられます。是も世帯を太切(た)に存(じ)まするに依(つ)て留ります。あなたへ参(つ)てこなたへ参らずにも置(か)れず、彼是致いて宿へ戻るもおそなはります。其(の)上たま／＼戻れば、あのごとくに追(ひ)はしらかします所で、おのづと帰る隙のある時も、帰らぬ事も御さる。今日も戻ると其(の)儘山へ参れと申(し)ます。夫も参るまいでは御座らねども、少し休んで参(ら)うと申せば、夫をも聞(き)わけいで、

あのごとく追(ひ)はしらかします。さりながら、とかく私が山へさへ参れば濟(む)事で御ざる程に、何卒あのあふこと鎌とを取(っ)て被下(ひ)さい。商人「則(ち)きゝわけた。すれば山へ行(か)うじやまで。シテ「中々。商人「夫成らば其(の)通りいふて取(っ)てやらう。まづ夫におまちやれ。」「心得ました。商人「是(は)急度叱(っ)たれば山へ行(か)うといふ程に、其(の)あふこと鎌とをやらしめ。女「すれば山へ参らうと申(し)まするか。商人「中(ち)ノ。女「山へさへ参れば能う御ざる。夫成らば此(の)かまと柄をやつて被下(ひ)い。商人「心得た。是(は)ノ、此(の)鎌と柄を取(っ)てやる程に、早う山へいた成らば能(か)らう。

シテ「是は忝(う)御ざる。何が扱山へ参りませう。今日もこなたの能(い)所へ出合(う)て被下(ひ)て、あまの命を助(か)りました。若(し)こなたの出で被下(ひ)ねば、あの女に打(ち)殺さるゝ所で御ざつた。商人「誠にあぶない事で有(っ)た。扱太郎、能う聞(か)しめ。又してもノ、そなたが夫婦いさかひをするに依(つ)て、地下の衆も他郷の衆も、うしろ指をさいておわらやる。某もけふこそ出合(う)たれ。以来は出合(は)ぬ程に、さう心得さしめ。シテ「何が扱、もはや夫婦いさかひを致す事では御ざらぬ。商人「是(は)ノ、そなたも早う宿へ戻らしめ。女「心得ました。ヤイわをとこ、まだ山へ行(か)ぬか。シテ「扱々せわしい女(ぢ)や。今山へ行(く)といふに。商人「さあノ、早う戻らしめ。女「心得ました。と云(う)て商人共幕へ入る。

シテ「扱もノ、あぶない事かな。能(い)所へ誰殿の出合(う)て呉(れ)られた。あの人が出合(う)て呉(れ)られぬと、すでに打(ち)殺さるゝ所で有(っ)た。先(づ)急(い)で山へ参らう。イヤ誠に、世にわしい女も有る物で御座ざれども、こちらの女共の様にわしいものは御ざるまい。何の因果であの様なをんに連(れ)そふた事(じ)やしらぬ。ハア、扱今誰のいはるゝは、又してもノ、夫婦いさかひをするといふて、地下の衆も他郷の衆もうしろ指をさいてお笑やる。重(お)て夫婦いさかひをしたりと出合はせぬとおしやつたが、若(し)誰そ出合(う)て呉(れ)ねば、身どもはあの女に打(ち)殺さるゝといふ物(じ)や。男と生れて女に打(ち)殺さるゝといふは、何共口惜(し)い事(じ)やが、何とした物(じ)で有らうぞ。を、それノ、人といふものはぜひ一度は死(な)いで叶はぬ物(じ)や。女に打(ち)殺されうより、此(の)さきの淵へいて身をなげて死んでのけう。が能うノ、思へば、女わらへの様に淵川へ身を投(げ)た成らば、いよノ、人が笑らうで有(ら)う。是はまづ何とした物(じ)で有(ら)うぞ。を、夫よ。百姓の似合ふた様に此(の)かまで腹を切らう。是(は)ノ。これは能(い)事を思ひ付(け)た。誠に、此(の)間から山へいて木を伐らうノ、と存(じ)して、此(の)鎌を研(ぎ)すまいて置(い)たが、是は木はこらいで身共が腹を切る。扱々是非も無(い)事で

御ざる。扱某は終に腹を切(っ)た事は無いが、何として切(る)物で有(ら)うぞ。去(り)ながら、別にむつかしい事も有(る)まい。先(づ)此(の)鎌をかう振(り)上(げ)て、左の脇坪へがはとたて、力にまかせて右へきり(っ)と引(き)廻いた成(ら)ば、定(め)て腹わたがくはら(っ)と出ると、目がくる(っ)とまふて、其(の)ま(死)ぬるで有(ら)う。是(れ)は、これは六(つ)ヶ敷(も)ない事(じ)や。是に致(さ)う。連(も)の事に此(の)よしをふれてから死(な)う。イヤなう(っ)、地下の衆も他郷の衆も能(う)御(き)やれ。身共が日頃女共に追(ひ)走(ら)かざる(っ)といふて、何れも御笑(や)るげな。それゆゑ太郎はを(と)こが立(た)ぬに依(つ)て、百姓の似合ふ様に鎌(ばら)をするが、誰も見物は無いか。や、誰も見ては無いか。是はいかなこと、一人も見ぬ。扱々(り)多い事(じ)や。此(の)いさぎよう腹をきるを、誰(れ)を見せたい物(もの)が、とや斯(う)いへば時刻(じ)が移(る)。是非(に)及(ば)ぬ。先(づ)はだを脱(いで)鎌(ばら)を致(さ)う。一段(と)よい。ヤア、今(いま)が最(さい)期(き)じや。ヤアエイ。アいた(っ)。(っ)。しっくりとしたが、鎌(ばら)の先(づ)が当た(つ)たかしらぬ。ハア、見れば疵(きず)も付(か)ぬ。笑(ら)ふて、中(ちゆう)の(っ)此(の)様な事(じ)では腹(はら)をきられまい。はて口(くち)をし(こ)事(じ)やが、何(なに)としたもので有(ら)うぞ。を(っ)夫(つま)々(々)、此(の)かまを斯(う)頭(かぶ)かけて、力(ちから)にまかせて前(まへ)引(い)た成(ら)ば、首(くび)はこ(ろ)りと前(まへ)落(ち)う。首(くび)さへ落(ち)たならば其(の)ま(死)ぬるで有(ら)う。是に致(さ)う。是は珍(めづ)らしい死(に)様(さま)じや。皆(みな)の者(もの)に触(ふ)れて死(な)う。なう(っ)、太郎(たろう)はちと分別(ぶんべつ)をかへて鎌(ばら)といふ事(じ)をして死(ぬ)るが、是(こ)はつ(っ)とめづらしい死(に)様(さま)じや程(ほど)に、誰(れ)も出(で)て見(み)ぬか。や、誰も人(ひと)は無いか。扱(あ)々(々)残念(ざんねん)な事(じ)哉(や)。毎(まい)も今(いま)時(とき)分(ぶん)は人(ひと)が出(で)るが、けふに限(こ)して一人(ひとり)もお(お)らぬ。近頃(きんご)残(のこ)りをしい事(じ)じやがぜひもない。さらば鎌(ばら)くびを致(さ)う。さりながら、中(ちゆう)の(っ)只(ただ)引(か)れまい。声(こゑ)を三(さん)つ掛(か)けて、三(さん)つめに引(か)う。ヤアエイ、一つ(いつ)よ。ヤアエイ、二(ふた)つよ。今(いま)一つ(いつ)が最(さい)期(き)じや。ヤアエイ。下(した)に居(ゐ)て笑(ら)ふて、扱(あ)も(っ)くちをし(こ)い事(じ)じや。何(なに)ほど引(か)う(っ)と思(おも)ふても、手(て)が憶(おぼ)病(びょう)で引(か)れぬ。何(なに)卒(そ)手(て)の入(い)らぬ死(に)様(さま)は無いかしらぬ。それ(れ)も、目(め)が憶(おぼ)病(びょう)で、あの鎌(ばら)のぎる(っ)とする所(ところ)を見ては、いかな(っ)おそろしうてそばへ寄(よ)る(っ)事(じ)では御(ご)さらぬ。イヤそれ(れ)も、目(め)を明(あ)いて居(ゐ)るに依(つ)てじや。今(いま)度は目(め)をふさいで走り(は)か(っ)て見(み)う。ヤア。笑(ら)ふて、扱(あ)も(っ)浅(あ)ましい事(じ)じや。何(なに)ほどに思(おも)ふても、最(さい)早(さい)鎌(ばら)のあたりじ(じ)やとおもふと、目(め)がほ(っ)ちりと明(あ)いて、中(ちゆう)の(っ)此(の)分(ぶん)で死(な)れぬ。とかくまた定(さだ)

業が尽(き)ぬと見へた。ハアそれ、身共はうろたへた。誰見た者もなし、身共さへ了簡すれば死(ぬ)るには及ばぬ事じや。やれ、あぶない事をした。すでにあまの命を捨(て)うと致(い)た。どれ、鎌を仕廻(まわ)ふて山へ参らうと存(ぞん)ずる。と云(い)て鎌を拵(た)へ、なう、誰そ山へ行(く)ものはないか。行(く)ものが有らば同道せう。や、女共が声(こゑ)が致(いた)す。き、かた衣(きぬ)をぬぎて、ヤア、太郎は今鎌腹(こゝろ)をする。今が最期(さいご)じや。女「やあ、夫は誠(まこと)か、真実(まこと)か。扱(あつか)々それはにがしい事(こと)じや。申(まを)し、是は何とした事で御(ご)ざるぞ。おもひ留(とど)めて被(お)下(くだ)さい。レテ「ヤイ、夫へ来たは何者(なにもの)じや。女「わらはで御(ご)ざる、レテ「わらはといふは女共(にょども)か。女「中(な)か、わらはで御(ご)座(ま)る。是はまづ何とした事で御(ご)ざるぞ。レテ「おのれは身共(みども)が腹(はら)を切(き)るを見物(みぶつ)に来(き)たか。そこをはなせ。腹(はら)わたを打(うち)付(け)て呉(くれ)うぞ。女「なうかなしや。何事(なにごと)もわらはがわるう御(ご)ざった。何卒(なにげ)おもひとまて被(お)下(くだ)さい。レテ「おのれ能(よ)う聞(き)け。そちが又(また)しても、身共(みども)をおいはしらかすといふて、地下(ちか)の衆(しゆ)も他郷(たきやう)の衆(しゆ)も、後(あと)ゆびをさいてお笑(わら)やるげな。夫故(つまご)太郎(たろう)は男(おとこ)が立(た)ぬに依(よ)つて、最早(まはやく)思(おも)ひ詰(め)た。其(その)手(て)をはなせ。いさぎ能(よ)う切(き)つて見(み)せう。女「もはや向後(きやうご)はせわをやかする事(こと)では御(ご)ざらぬ程(ほど)に、何程(なんぢやう)思(おも)ひ留(とど)めて被(お)下(くだ)さい。レテ「おのれ今(いま)こそ其(その)様(さま)にいへ、宿(しゆく)へ戻(かへ)つた成(なり)ば又(また)せびらかす有(あ)らう。どう有(あ)つても切(き)らねば成(なり)ぬ。女「すればどう有(あ)つても思(おも)ひ留(とど)ませら、事(こと)は成(なり)まぬか。レテ「何(なん)と思(おも)ひ留(とど)まる、物(もの)じや。女「それ成(なり)ばわらはに隙(ひま)を被(お)下(くだ)さい。レテ「夫(つま)はなせに。女「はて、こなたのはらを切(き)らせられて、何(なん)とわらはが生(なま)きて居(ゐ)る、物(もの)で御(ご)ざるぞ。淵(ふみ)川(がは)へ成(なり)と身(み)を扱(あつか)つて死(に)にまする。レテ「何(なん)じや、淵(ふみ)川(がは)へ身(み)を扱(あつか)つて死(に)ぬる。女「中(な)か、扱(あつか)つた夫(つま)は氣(き)のどくな事(こと)じや。それ成(なり)らばおもひ留(とど)まるまい物(もの)でもないが、向後(きやうご)某(たれ)をせびらかすまいか。女「何が扱(あつか)つ、思(おも)ひ留(とど)めてさへ被(お)下(くだ)るゝならば、中(な)か、せびらかす事(こと)では御(ご)座(ま)らぬ。レテ「イエ、夫(つま)成(なり)らば思(おも)ひ留(とど)めてやらう。女「やれ、うれしや。わらはも夫(つま)で安堵(あんた)致(いた)して御(ご)座(ま)る。レテ「扱(あつか)某(たれ)はあまの命(いのち)をひらふたに依(よ)つて、寿命(じゆんめい)は長(なが)からう、レテ「長(なが)う御(ご)座(ま)らう共(ども)。女「五百(いほひやく)八(はち)十年(ねん)。レテ「七(なな)廻(まわ)り迄(いた)も。女「それこそめでたけれ。こちへわたしめ、レテ「心(こゝろ)得(え)ました。又(また)込(こ)にもする。レテ「何(なん)じや、淵(ふみ)川(がは)へ身(み)を扱(あつか)つて死(に)ぬる。中(な)か、

「夫(つま)は誠(まこと)か。女「誠(まこと)で御(ご)ざる。レテ「真実(まこと)か。女「一定(いぢやう)で御(ご)座(ま)る。レテ「扱(あつか)つたそなたは男(おとこ)増(ま)りな。けなげな事(こと)をいふ人(ひと)じや。夫(つま)成(なり)らば能(よ)い相談(さうだん)が有(あ)る。女「夫(つま)は又(また)いか様(さま)の事(こと)で御(ご)座(ま)るぞ。レテ「有(あ)り、様(さま)は、某(たれ)も余(あま)り面目(めんもく)が無(な)いに依(よ)つて、鎌(かま)ばらを切(き)らうと思(おも)ふて、色々(いろいろ)として見たれども、憶(おぼ)病(びやう)で中(な)か、切(き)られぬ所に、そなたは身(み)共に引(ひ)かへて、けなげな事(こと)をおしや

る。迎も死(ぬ)る命成らば、某が名代に此(の)鎌ではらを切(つ)てくれさしめ。と云(う)て鎌をつき付女「なうはら立(ち)や
ノ、あのわうちやくもの、どれへゆくぞ。やるまいぞノ」。シテ「ゆるさしめノ」。又夫成らば思ひ留らう。夫はわらほも嬉しう
御座る。扱身共はあまの命をひらふたに依(つ)て、寿命は長う御ざらう共。五百八十年。
七廻り迄も。夫こそめでたけれ。こちへ渡さしめノ。心得ましたノ。加様にも。

私は右の底本を見ていないので、一々の文字や体裁も知らないため、すべて岩波文庫本を出来るだけ忠実に写した。岩波文
庫本の例言に、

本書は、底本を忠実にうつすにつとめたが、大藏流山本東次郎師の口伝を参照して、濁点・半濁点を附し、句読点を施し、
脱字を「」の中に補ひ、衍字を「」でくくり、特殊な読み方、役人、囃子・謡物等を「」の中に注記した。但、元來
濁点のあるものには(マ、)と附記して、新たに施したところのものと識別した。即ち、それ以外の濁点・半濁点、句読点
及び「」∧「」∨「」等の括弧のものを除けば、底本に還元されるのである。

とするが、前に記した通り、振仮名は全部省き、送仮名は文庫本通りでなく、文庫本以上に私が一々書き加えたものであるこ
とをこゝわっておく。

○夫婦喧嘩を扱った狂言に、どもり・ひつくくり・いなばだう・賈聾などがある。女房がなまけもので、亭主をこきつかった
り、がみノ、というのが我慢出来ず、離縁しようとして女房が離さなかつたり、やはり女房が恋しかつたり、或はとうノ逃げ
出してしまつたりするのであるが、何れも世態人情の機微をうがったものである。

以下右掲の「かまばら」の本文について、大体本文の順に従い、注をしなから思いつくことを書き記すことにする。

○小書で、「初はどもりのごとく云々」とあるのは、「どもり」の曲の最初に、

女「ヤイわ男、おのれににくいやつ。打(ち)ころいてのけう。シテ「ア、ゆるいて呉(れ)いノ」。

と云(う)て幕より出、一べん
舞台を追(ひ)廻り、シテは一

合(う)て、追(ひ)掛(け)て来る所を女を留る。ア、誰そ出合(う)て被下い。あゝ、かなしやノ。辨人「扱々気のどくな事じ
ゃ。女「おのれを打(ち)ころいて、わらほも死ん(で)仕廻(ま)ふ。とあつて、辨人「是は先(づ)何とした事でおりやる。

と続くのである。

○わ男。我男・吾男・和男などと書く。男子を親しんでいふ第二人称。わぬし。狂言では自分の夫などを軽蔑して呼ぶような

時に用いる。○ころいて。殺してのい音便。さ行四段活用動詞が、て・たり(た)に連なる時に用いられ、戦記物語などにしきりに使われている。現在も富山・石川・福井・愛知・岡山・鳥取各県などに使われているが、標準語としては認められなくなった。狂言には非常に多く、本篇でも、致いて・しる指をさいて・研(ぎ)すまいて・引(き)廻いたなどある。○のけう。「のく」の未然形に、未来の助動詞「う」のついたもの。「のく」は「退く」で「しまう」の意。「う」はもとあらゆる動詞の未然形に付いたが、現在では五段に活用するものだけにつき、その他の活用では「よう」が用いられる。「のけう」はノキヨーのように発音する。「のけ」はエ段の音で、この類には、女に打(ち)殺されうより・あまの命を捨(て)うと・同道せう・呉(れ)うぞ・見せうなどが出ている。「捨てう」はスチヨオと発音する。謡曲夜討曾我に、「いざや出でう(イジヨオヨ)、鳥追に「討って捨てう(スチヨオ)ずるにてあるぞ」などいくらか見える。ところがここに注意すべきは、従来イ段の活用の「起く」「落つ」「見る」などに「う」がついた場合どう発音したかということである。見「う」の場合、謡曲熊野・桜川などに「見うずる」があるが、現在「ミウズル」と発音しているのを見ると元は「オキウ」「落チウ」であると類推される。然るに謡曲因柄の宝生流や喜多流の少し古い本を見ると、「いざこの魚をあゝ吉野川へ放いて見う」とあり、実際には「ハナイテミヨオ」と謡うのである。即ちしらがいつかミヨオと転じていることが分かる。そこで前述の「起きう」「落ちう」も少くも現在でもオキヨオ・オチヨオであろうと思う。これがやがて今日の実用語としては、ミヨー・オキヨー・オチヨーのごとく発音されるようになったものと考えられる。和泉流狂言大成「咲嘩」の中に「たづさはってみようと存ずる」同じく「宗八」の中に、「あけて見やう」(やうはようの誤)など、すでに「よう」になっている。○云て。正しくは、云うて又は言うてと「う」を入れるべきであるが、古い書きものには送仮名を省いて書くことが非常に多い。云うては云ひてのう音便であることは勿論である。云つてと促音便でもよいわけだが、狂言の書き方はこの場合専ら音便が使われる。また多く訓読する場合「言」よりも「云」を書いている。なお打ころいても「ち」を入れて書くべきである。ただ追廻り・追掛(け)ての如く、二つの動詞が結合して用いられる時上の文字が二音で、読みかたに疑いを生じない場合、今日でも送仮名を加えぬ人もあるが、私は送仮名は出来るだけ加える主義であるので、その考えによっていることを附記しておく。○中ばい、かまばらの本文に中媒とある通り、なかだち、仲介のことで、アドの済人というのと同じである。○ふて。追ひてのう音便であるから、追うてと書くべきである。このあと能う来たといふて・其(の)通りいふて・連(れ)そふた・似合ふた様に・目がくる／＼まふてなど非常に多

い。現代の仮名遣ではこの誤はないわけであるが、以前の仮名遣にはこの誤は大変多かった。被下い。くだされいと読む。これは漢文まがいの使い方で、終戦前まで使われた手紙の候文にも、被下度・被遊・被下まじくや、など盛んに用いられている。○三界、元来仏教語で、欲界・色界・無色界の稱。転じて過去・現在・未来をいい、更に三千世界、全世界にいう。ここは全世界の意で、広く世間を過大にいったのである。○ささせます。今日「ます」という助動詞に「る」はつけないが、狂言には終止形・連体形に「る」をつけるのが普通である。死にます。留めさせられます。留ります。おそなはります。申します。追ひはしちかします。申す所。申しますか、皆そうである。「まする」は、「まらする」が「まらする」となり「まする」となったものであるという考証が、創元社の能楽全書に「狂言のことば」の篇中亀井孝氏によって書かれている。○夫。古くそれという時盛んに使っている。○参りませぬ。今日打消の助動詞「ん」は「ぬ」で記して、発音も「ヌ」である。なんのやくにも立(ち)ませぬに依って・聊爾はさせぬ・御座らぬ・帰らぬ事も・出合はぬ程に等。待たしめ。使役の助動詞「しむ」を敬語に用いたものであるが、特に命令形がよく使われる。あふこと鎌とをやらしめ・能う聞かしめ・戻らしめなど。○聊爾。りょうじ、仮初なこと、ふしつけがましいこと、失礼。狂言によく使う。○世たい。世帯、しよたい。あとに世帯の字が出ている。○ささす。せさす。せさすとなつたもので、終止形はささすであるのがついたもので、前記のまするも同様である。○有(る)物でおりやるか。「ある」や「もの」に有や物の漢字がしきりに使われている。「おりやる」はお入りあるの約で、元来先方への敬語であるが、転じて自己の謙譲にも使うこと「御座る」と同様である。居(を)りやると書くのは非。○去(れ)ば。然あればであるのに、去の当字は狂言ばかりでなく随分使われていた。あとにある去(り)ながらも同じである。○太切。大切と書くべきである。○あふこ。切。オーコ、又オーゴ。物をかづくに使う棒。○則(ち)。すなわち。それはとかよし／＼の意。○行(か)うじゃまで。「じゃ」は、であるの約故、旧仮名遣では夕行「ちゃ」であるべきである。「まで」はこは念をおしているに使用している。○中(／＼)漢字だけを練りかえずには々を用いるのを普通とするが本書では／＼を多く使っている。あとに「をゝ夫々」とも書いている。「なかなか」は、半途、なまなか、かえて、すこぶる、容易には、ずいぶん、とても、など色々な意義に用いられるが、謡曲・狂言では多くの場合、勿論・その通りの意に用いる。ここもその通りの意。○いたなら。行ったならの約。○あまの命。天命の字の訓読かという。あまの命を助るかとか拾うとかいうのはよう／＼に生きるにいう。○地下の衆。シゲノシユ。ここは正しくは治下の衆とあるべきで、治下は配下又は支配下の

村々を言い、ここは他郷の衆に対し、土地の人々をさす。地下は清涼殿の殿上に昇殿を許されぬ官人の称であるが、禁裏に仕える公家衆に対してその外の人を言い、更に平民のことをいってのが治下にも誤り使ったのである。○おわらやる。お笑ひあるの約転したもの。おきゝやれ(オキキヤレと発音する)・おしやる(オシヤル)はおききあれ・仰せあるの約転であろう。但しおしやるは大官海には仰せらるの約とある。○けふこそ出合(う)たれ。こその係に対し已然形で結んでおることに注意したい。打(ち)殺さるゝ所で有(つ)た。「殺さるゝ」は現在では「殺される」であるが、この文では旧の活用のままで、誰のいはるゝは・追(ひ)走らかさるゝ・そばへ寄らるゝ事では・せわをやかする事では・思ひ留らせらるゝ事は皆同じい。前のこそ結びやこれらの使い方が今日の口語の過渡期を示していることは夫に面白いことである。○女共。女を複数にして妻をいう。尤も女だけでも妻をさすことがある。○夫婦いさかひをしたりとも。これも現在の口語では「したとも」「しても」である。○何の因果。何は謡曲でも狂言でも殆んど「なに」と読む。「なん」ということは極めて稀のようである。本文に「なんのや」に「とあるが他は「なに」である。○誰そ。たそ。誰をたれと読む時は誰ぞとなる。後に、誰も見物は無いか。誰見た者もなし、などあるは「たれ」である。今日口語では「だれ」と濁音にいう。○木を伐らう。「伐らう」ころうと読む。こるはきると同意義。○むつかしい。むつかしは現在にはむずかしいと濁るが、古くは清音で言われた。あとに六つヶ敷うもないと当字が使われているが、この当字も広く使われていたが、その場合「つ」を入れず六ヶ敷と書くのが普通のようなのである。こういう当字は語の清濁などを知る上に参考になることが多い。○くはらゝ。擬声語で、ぐわらゝと書くべきである。○見へぬ。見えぬの誤。○ヤアエイ。こういう言葉もヤアエイとするべきで、前にをゝそれゝとあるのも、おゝそれゝが正しい。○分別を。謡曲や狂言では、つ音の下に「を」が来ると促音にし、下がト音に発音される。分別をはフンベツトという。○毎も。いつもと読む。○人は出るが。今日は「出る」は「でる」であるが、狂言の方では「づる」という。旧文法の下二段活用の使用法による。これも注目すべき読み方である。○臆病。臆病の誤。○此(の)当りが。当りは辺りと書くべきである。○定業。ジョーゴ。仏法語。定まった業報。きまっている運命。○仕廻ふて。漢字を用いるなら、仕舞うてと書くのが普通である。「ふ」は「う」の誤。○向後。キョーコーと読む。日常はコーゴとも読む。○五百八十年・七廻り。五・八・七は數量をいうによく使った。一廻りは普通人の生年を十二支に配するので十二年をいう。ここは或は一廻りを百年と見たものかと思われる。

以上一通り語句の読み方・意義を記し、誤字や送仮名などについて注記し、私の意見を附加したが、送仮名は推定であるから、原文の筆者の意と反するものが一二あるかも知れない。

謡曲や狂言は伝統を固守されていると思うが、狂言は謡曲程嚴重でないような点が感ぜられる。しかし全体的に筋などには大きな違いはないと信じる。

私の述べたところは右記の狂言の言葉が室町時代の口語のままであるかどうかということは問題外として、どこまでも原文だけに基づいて記したものであって、これによって狂言が単純な中にユーモラスな表現をして、人情の機微をうがっている点を十分に観察してもらいたい。大体狂言は文句のみでなく、その仕草が非常にユーモラスなもので、その仕草を見ることによって、更に一層喜劇的実態を知り得るのであるが、文句だけでも七分通りは察知し得るのである。

次に狂言の文が今日の口語の過渡期的な様態を示していることに特に注意したいことである。

最後にこの原文に送仮名や文字の誤が随分目立つのであるが、虎寛自身與書に「文字假字のたがひをただすにもおよばず、又あだし人に見すべき物にもあらねば、ゆくりなくかきなせしなり。猶此のち隙をえたらん折しも書あらためむことをおもふのみ。」とことわつてある。

ここに附記しておきたいのは、当時の文の書き様として、送仮名の省かれていたのは一般の風であり、誤字などの点については、一代の文豪近松門左衛門などのものにも随分ひどい当字や誤字などが記されていることで、例えば、擁護を応護、当然を当前と書いたり、字音のくわとすべきをくはとしているなど、あれほどの人がと思うことが多いのである。

(昭和三十三年二月二十六日)

大学御指定

三吉写真館

国鉄住吉駅南
TEL ④ 7730

大学御指定

甲南堂書店

国鉄本山駅前
TEL ④ 5700